

ハコベ (ミドリハコベ、ハコベラ、アサシラケ)

牧 幸 男

『藤村詩集』に収められた『落梅集』の序文に「われ信濃なる山家に草枕ひき重ねて、ここに早やことせ、客心慰めかねし折々書き綴り
なとしけるをとりあつめて落梅集といふは、……」と記述がある。その最初の詩が

小諸なる古城のほとり 雲白く遊子悲しむ 緑はこべなす繁ふすま裏は萌えず 若草しくも藉によしなし しろがねとの衾の岡邊 日に溶けて淡雪流る
である。参考に英語訳を示すと

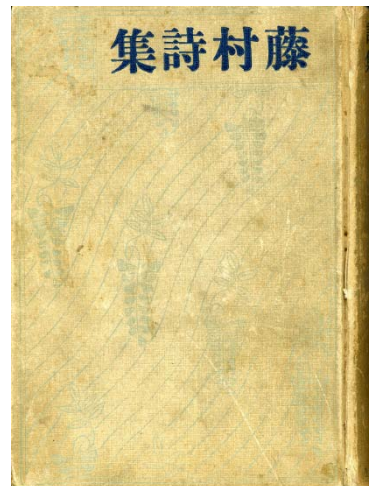
THE ANCIENT CASTEL AT KOMORO

By the ancient castle at Komoro Clouds are white; the traveller sorrowful. The chickweed is not yet green.
And there is still no early grass to sit on. Down the silver-covered hillside Melted snow flows in the sun.

本格的な春が待ち遠しくなると、私はこの詩を毎年思い出す。同時に、父が私に渡してくれた『藤村詩集』(明治37年9月4日発行、大正4年4月10日改定13版)を開くのである。父がどのような青春を過ごしたか語ることはなかった。しかし、詩集の保存状態から、父の青春を垣間見ることができる気がして、私はこの詩集を宝物のようにしている。

「青春」人生の春である。この時期は人生で最も素晴らしい時であるよう、自然界でも春を待つ気持ちは、四季で一番嬉しい時ではなかろうか。長野県の春は美しい。それでも3月になると日当たりのよい所では、七草に選ばれているハコベが芽を伸ばし始める。

ハコベは、ナデシコ科の越年生草本で、私達の身近に存在するいわゆる雑草の一つ、国内どこの路ばたや畑に普通に生育している。秋に芽を出し越冬し、春になると茎を叢生し、地面に広がるように成長する。草丈は15~30cmで、下部は地上に横臥している。弱々しく柔らかい葉は対生、卵円形ないし卵形、先端は鋭く尖り、全縁、長さ1~2cm、無毛である。春、枝先に集散花序を出し、がく片5個の多数の白色の小花を開く。花の形をよく観察すると、兎の耳のように根元近くまで深く2裂しているの、一見10弁に見えるが花の姿は5弁である。この5弁の姿が属名の星形Stellariaになったのである。ハコベの特徴は花が開くまでは柄が直立しているが、受粉をすませると柄が曲がり、下を向く。やがて種が実ると、柄は急に立ち上がり、上向きの実の先が破れて少しずつ種がこぼれる。一般的にハコベを指すとき、ミドリハコベとコハコベを混同しているが、ミドリハコベはコハコベとよく似ているが、葉が大きいので区別がつく。生育状況もコハコベ同様、時にコハコベの変種として取り扱われることもある。



藤村詩集



ハコベの花

『新訂牧野新日本植物図鑑』には、ハコベと名前が付く植物は、ウシハコベ、ミヤマハコベ、ツルハコベ等11種収載され、類いの多い植物である。しかし、ハコベは葉の形や大きさ、無毛から容易に他種と区別できる。詳しく調べると、世界には約120種あり、日本には約18種生育している。

身近な植物の中でハコベとオオバコと良く比較されるが、生育習性に大きな違いがあるからである。オオバコは人が歩く所はどこでも育つが、ハコベは人の声の聞こえる所にのみに生育する点である。奥深い山道でも人が通る場所では、必ずオオバコを目にすることができるが、ハコベは人が耕す畑や路傍、庭とその周辺でしか生育しないからである。

七草に選ばれているよう、古くから私達と生活を共にしてきた植物である。食用が主だったのか、江戸時代まで詩歌には殆ど選ばれなかったが、明治以降は良く詠われるようになった。

けふぞかし なずなはこべら せりつみて はや七種の おものまゐらむ 慈真和尚

カナリヤの 餌に束ねたる はこべ哉 正岡子規

植物名の由来は、日本最古の本草書『本草和名』(918年)に、波久部良として登場しており、これが転訛したものと考えられている。しかし、ハクベラの語源については不明である。牧野富太郎博士も「ハクベラの略と言われるが、意味は不明とし、漢名は繁縷である。」と述べている。別名は、アサシラケ、ハクベラ、トキシラズ、ヒヨコクサ、鶏腸、百磁草など多く知られている。由来は、アサシラケは朝日が当たると花が盛んに開くから「朝開け」が転訛、ハクベラは葉が良く配置されて生育するので「葉配り」から、トキシラズ(冬でも花が咲く)、ヒヨコクサ以下は鶏のえさにするからである。学名 *Stellaria neglecta* で、属名は星の意で花の姿から、種小名は「つまらない」意から、星型の花を咲かせ、どこでも見られる植物となる。

薬用は、多くの国々で使われている。イングランドの場合、脇腹の痛み、湿疹、吹き出ものに利用してきた。中国では漢方処方に配合されることは稀であるが、民間療法として利用されている。生薬名の繁縷について李時珍(1518~1593)は「この草は茎の蔓が甚だ繁り、中に一縷(細い筋)がある。故に名づけたのである。」と述べている。また、蘇頌(1020~1101)は「即ち鶏腸草である。・・・葉は苜蓿に似て小さく夏から秋の間に小さな白黄花を生じる。茎梗は鶴鳥になっていて、之を断ては縷(糸)がある。・・・また細くて中空であり、鶏腸に似ているところからその名がある。本径には繁縷と鶏腸の二條に分けているが、これは一物二名である。」と述べ、効能は「血を主り、婦人はしょくして宜しい。」とある。又ヨーロッパでも民間療法として歯痛、発疹、利尿、炎症等に利用している。

わが国では、日干した茎葉を生薬名繁縷と呼び、利尿、催乳、産前産後の浄血、産後の肥立ちに利用してきた。最も利用された療法は歯磨き粉としての利用である。『和漢三才図説』(1913)には「生ハコベを搾った汁を塩と共にアワビの貝殻に入れて焼、乾けばまた青汁加え7度に及ぶ。」とある。又、ハコベの粉末を等量の塩と混合したものを「ハコベ塩」と呼び良く利用されていた。或いは、生の茎葉を健胃、整腸、腹痛、便秘等にそのまま食べるか、しぼり汁を飲んだりしていた。

わが国の古医方の開祖と言われている永田徳本* (1513~1630)は「急ぐ道、歩いて呼吸が切れるなら、ハコベの汁を飲むべし。」とよく口にしていた。注*: 人生の最後は岡谷に長く住み、東福の尼堂墓地に葬られている。

食用の歴史は古く、丹波康頼の『医心方』(982~984)をはじめ『百姓伝記』(1682頃)、『救荒本草啓蒙』(1842)等など、多くの書物に見ることができる。『医心方』の食養篇に、菜と呼ぶ野草が十数種示されているが、この中でハコベは「ハクベラ」の名で登場している。又、『百姓伝記』第12巻の蕪菜耕作集の49項目中に「ハコベの種兩種あり。・・・冬春に葉多きものなり。夏秋に葉少なく、日陰になつては答えず。・・・軒下・垣きには種をふり置。冬春葉をつみ喰ふなり。」と記載があり、青菜として役立っていたことが分かる。現在も茹もの、ひたしもの、ごま和え、味噌汁の具に利用している。

ハコベの花言葉は、「初恋の思い出」「追想」「愛らしさ」である。